

盛岡に刻まれた歴史の足跡

盛岡地域には安倍・藤原時代の足跡が残っている。前九年合戦を記した軍記の陸奥話記、鎌倉幕府の公文書の吾妻鏡を基本資料として、盛岡地域の伝承や伝説を聞き取りし、遺跡の発掘結果などを基にその足跡をたどった。古代、安倍、藤原時代の3部構成で20回にわたって紹介する。(荒川聡記者)

古墳は語る 古代①

遺跡の発掘調査で、古代の盛岡は河岸段丘や山沿いに集落が形成されていたことが分かっている。

盛岡市通史(1970年盛岡市発行)の中で、故草間俊一岩大名や教授は「この時代の人々は平地や川に臨

(えぞ)森古墳群と上田蝦夷森古墳群がある。

このうち太田蝦夷森古墳群からは和同開珎(わどうかいちん)、

中央の貴族や役人が締めたベルトの鍔帯(かたい)金具と呼ばれる装飾品などが出土している。

太田蝦夷森古墳群の年代は8世紀(奈良時代)になる。周辺の村の村長か、一族の長のような立場の人が埋葬された場所と考えられ、正確な数は不明だが数十基あった。

蝦夷研究会の八木光則さんは太田蝦夷森古墳群の出土品について「鍔帯金具は表と裏の

金メッキの鍔帯金具 位の高い装飾品が出土



太田蝦夷森古墳群から出土時の鍔帯金具(盛岡市遺跡の学び館提供写真)

ひとつとしてもらつた。地元に戻ってからは集落の長として権威の象徴になる。

ベルトとして渡されたのなら、同じベルトに付いていたはずのほかの金具も出ていいはずだが、表と裏の金具1セッドしか出ていない。

八木さんは「朝貢で都からもらったときは完全であつたが、地元で分与された可能性がある」とみる。ベルトとして使えなくなつても付属の金具は、それだけで権威の象徴としてあつたのだろうか。

金具を分け合つたのなら、太田蝦夷森古墳群の他の古墳から同様に見つかつていいはずだが、まだ見つからない。(つづく)

金具ではめ込む、銅製で金メッキ(金銅)の「金メッキ」とも言つていい。金メッキをしていた。金メッキ

をしているということに問題があつて、というのは、金メッキされた装飾品を持つているのは位が5位以上の人

中央の記録には、かわりのあると思われる人名は出ていない」と話す。

ベルトの革は牛と言われ、朝貢の見返りの

盛岡に刻まれた歴史の足跡

志波城と徳丹城 古代②

朝廷は8世紀後半から21年（802年）に胆沢に盛岡周辺に集落が増えている。

志波城は北上川と雫石川の合流点付近に広がる平地に造営され

た。840坪四方の築地塀（ついでい、土を突き固めて構築した土塀）と928坪四方の土塁を伴う外大溝に

よる二重構造。城内中央南寄りに政庁があり、150坪四方の築地塀で囲み、その周囲に官衙（かんが）で働く役人の建物群などがある。

元盛岡市議の藤原仁工門さんによると「志波城には金の鳩が埋まっているという伝説がある」という。八幡神社（下太田林崎）のすぐ横に藤原さんの大本家がある。「そこにはわき水（雫石川の伏流水と推定）があり、そこで農家の方々がもみ種を浸けていた。八幡太郎義家の馬が足で突いた場所から水がわいた」と言い伝えられている。

志波城は水害にたびたび遭い、わずか10年で廃城になった。

弘仁3年（812年）3月ごろ、文室綿麻呂によって徳丹城が造営

された。その徳丹城の後に建てられた官衙ではないかと推測されているのが盛岡市下太田の林崎遺跡。

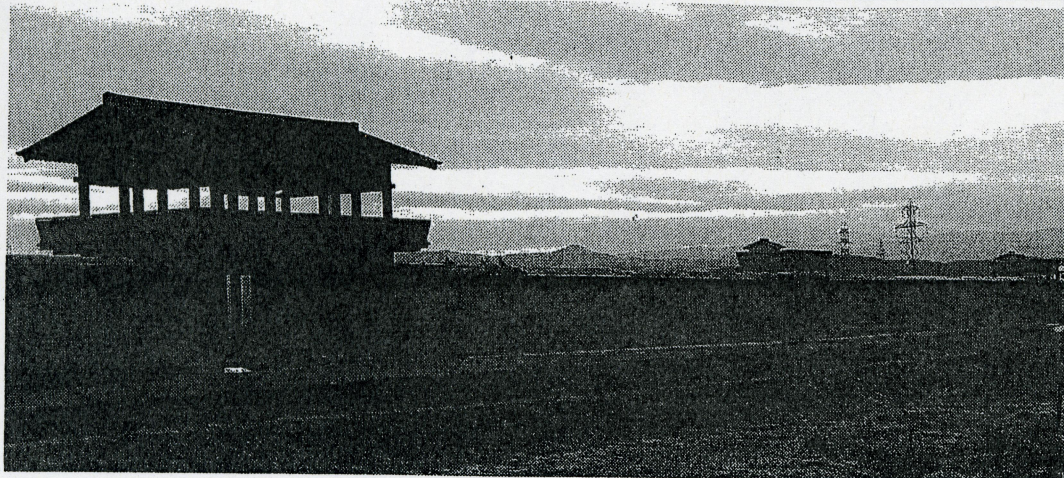
同遺跡は志波城北東に位置し、範囲は東西300坪、南北200坪。堅穴住居跡から9世紀後半から10世紀前半の遺跡と推定されている。建物とは前後関係にあるが、板塀の跡が出ている。

中心部に計画的配置の掘立柱建物群2間×5間（約32平方坪）、地形や地割から一辺70×80坪の方形区画ではないかと推定されている。集落ではあるが、行政官庁と仏教施設の両面の性格を持ち、豪族の館の可能性も推定されている。

盛岡市遺跡の学び館の室野秀文さんは「志波城に隣接した場所に

あり、恐らく当時の朝廷の権威を背景にして成立した公の施設か、地方の豪族が朝廷に取り立てられるような形で地域の支配に当たっていた拠点か。朝廷が蝦夷を直接支配する形というよりは、だんだん地元の人間を登用して現地支配を任せていく段階の遺跡だと思ふ」と推定する。

（荒川聡記者）



志波城古代公園

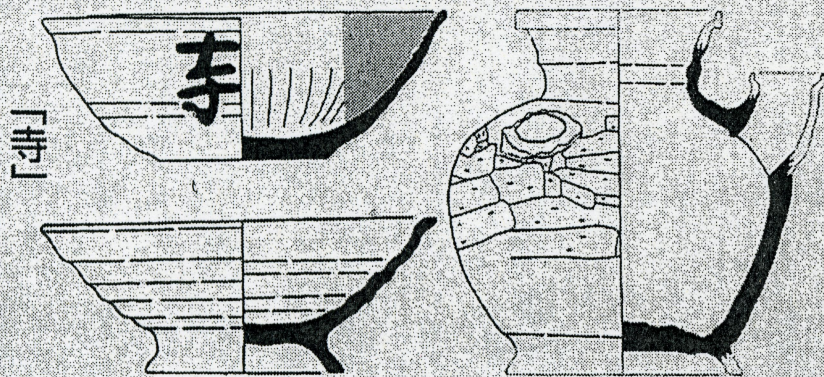
金の鳩埋まる地

宗教儀式つかさどる？

盛岡に刻まれた歴史の足跡

林崎遺跡 古代③

林崎遺跡（盛岡市下太田）からは寺と書いた（たしへい）など宗教である墨書土器や、注ぎ口が複数ある多嘴瓶



右図が多嘴瓶（作図は盛岡市遺跡の学び館）。欠けた状態で出土したが左側にも注ぎ口があった

物がかなりの数出ている。盛岡市遺跡の学び館の室野秀文さんは「調査区外に仏堂などがあるかもしれないが、官衙（かんが）の建物で、宗教的活動も行われた可能性もあるのではないかとみている。

多嘴瓶の役割は何か。国立歴史民俗博物館は「最近では多口瓶（たこうへい）と呼ばれる。窯製出土例を除くとそのほとんどが寺院跡からの発見。平城宮内で出土した奈良三彩多口瓶に『供養』と記した墨書土器が伴っていたことから、宮中においても仏事で用いたと考えられる。形態から清浄な水を入れる浄瓶の一種かと推定される。中国や朝鮮半島では現在のところ確認されていないので、現況では日本で独自に展開した器形、今後の研究次第で変更する可能性はある」と説明する。

宗教的な使われ方をした可能性が高いようだ。蝦夷研究会の八木光則さんは「緑などの色を付けて多嘴瓶が作られているものがある。出土年代は8世紀から遅くとも10世紀ころ。林崎遺跡の時代にはほかでは作っていないのかもしれない。具体的にどういう用途に使われていたのかよく分からないが、基本的には寺院関係の遺跡から多く出ており、仏具の一つとして考えている」という。

これまでの調査から、林崎遺跡は官衙の性格を持った豪族の館で出土品から寺院としての性格も持っていたと考えられる。官衙とするなら居住していた

豪族は在庁官人ということになる。

どのような人物だったのか。室野さんは、林崎遺跡を安倍氏の支配が薄かった時代の遺跡とみる。「盛岡のエリアで安倍氏の影響力が強くなってきたのは恐らく10世紀後半。そんなに安倍氏の影響力がかかっていた時代にあつたのが林崎遺跡」という。

工藤雅樹福島大学名誉教授は「10世紀になると本来の政庁はみな姿を消している。安倍氏とかかわりについては具体的には何とも言えない。安倍氏の時代に改めて岩手郡に至るまで支配体系が再構築されたが、それに

係するかもしれない」と語る。

八木さんは「その当時、安倍氏自体が勢力を持っていたかどうか問題になる。胆沢城の方でも在庁官人という話がある。それが、いつ勢力になったのか。また当時は、有力者が

各地にいて、それが最終的に安倍氏に統合されていくのではないかと話す。

林崎遺跡は、また安倍氏の影響力がそれほどなかった時代の、地域の有力者の遺跡という見方が多い。

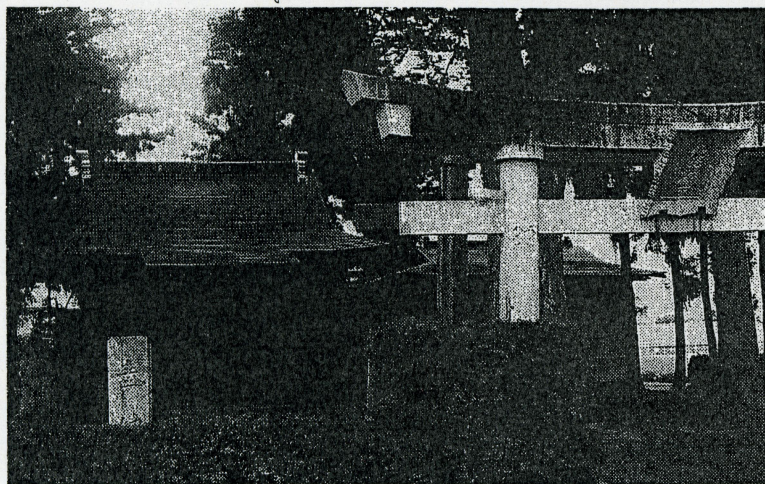
（荒川聡記者）

「外従五位下」の豪族

盛岡に刻まれた歴史の足跡

斯波連登場 古代④

しわのむらじ
安倍氏の勢力が盛岡地域に及ぶのは10世紀後半とみられている。10世紀前半とされる林崎遺跡と安倍氏とのつながりを直接的に物語るものはない。この地は、どのような人物が治めていたのだろうか。



林崎遺跡内にある林崎八幡神社

のむらじ)の名前を掌する。
続日本後紀巻四(仁明天皇)の承和2年(835年)2月に「浮囚歟五等吉弥宇加奴。歟五等吉弥志波字志。歟五等吉弥侯億可太等。物部斯波連の姓(かばね)を賜ふ」とある。5年後の承和7年には物部斯波連宇賀奴(宇加奴と同一人物)に外従五位下の官位が授けられたとある。物部氏は大化の改新(645年)で蘇我氏に滅ぼされたが、物部に地名を加えて姓として与えられている。
八木さんによると、従五位というのは朝廷では地方長官クラスの官位だが、外従五位下は俘囚に与えられていた独特の官位。斯波と志波は同じと考えていいという。

日本三代実録の陽成

天皇の元慶5年(885年)5月3日の記述にも物部斯波連永野という人物がみられ、同族の可能性も推測される。林崎遺跡と直接関係付けられるだけの物証はないが、同遺跡と近い年代に物部斯波連を名乗る勢力があったことは確かであった。
県南を主体とした勢力

力だった安倍氏が、10世紀後半には奥六郡に勢力を拡大、その過程で各地の小勢力を吸収していったと考えられている。そうした場合、林崎遺跡の主や物部斯波連も安倍氏の勢力下に入ったか、武力で滅ぼされたかいずれかだったのかもわからない。
岩手郡の成立について
「大和物語」(岩手書店『日本の古典文学体系』天曆5年(951)までに執筆)に「陸奥國、磐手の郡よりたてまつれる御鷹、よになくかしこかりければ、になつおぼして、御鷹手にしたまひけり。名を磐手となむつけたまへりける云々」とある。
岩手郡から朝廷に鷹を献上したことを示しており、岩手郡という名前が初めて文書に出た。

盛岡市通史で故板橋源岩大名普教授は「大和物語の成立年代については諸説あるが、岩手郡は10世紀にはすでに成立していたことは間違いない」との見解を書いている。
蝦夷研究会の八木さんは「10世紀の終わりがら岩手郡に遺跡が増えてきている。岩手郡が成立し安倍氏が厩川柵を構築し、北の拠点としたのも、もしかしたら、この時期なのかもしれない」とみ

(荒川聡記者)